

# 古い神楽を守る

安芸高田神楽を担う人々 —その4—

広島県を中心に巻き起こっている神楽ブーム。神楽公演が各地で催され、他の神楽団の神楽を目にする機会が多くなり、それに影響され、各神楽団の舞い方や奏楽、演出方法に変化が出てきています。そのような中、先人から受け継いだ舞の伝承に力を注いでいる梶矢神楽団。安芸高田市の神楽文化の元祖として、古典演目の伝承を重視し活動を続けています。



高宮神楽まつりで披露した「神儀舞 御座」。東西南北中央の神々をこの御座に招請し、五方を押し手に持つ奠座を清めて神前に供する。



広島県無形文化財に指定された「鐘座」。



練習に取り組む団員たち。演目は「塵り輪」。

古い神楽を大切に  
してきたからこそ、今の  
梶矢神楽団があります



梶矢神楽団 団長  
長尾 良文さん (58 歳)

寛政12(1800)年にはすでに神楽団の活動があつたとされている梶矢神楽団。安芸高田市の神楽文化の元祖として、梶矢に伝わる舞を大切にしています。「古くから伝わる舞や歌を、私たちの代でためにするということはできません。古い神楽を大切にしてきたからこそ、今の梶矢神楽団があります」と語るのは梶矢神楽団団長の長尾 良文さん。「広島を中心部でも東京でも、梶矢の舞を見せていけばいい」と言う長尾さんは、安芸高田市内の神楽団の多くが新作高田舞に重点を置いて練習を積む中、「梶矢に伝わった舞」を伝えていくため、旧来からある演目の保持に努力を重ねています。

現在、安芸高田市の神楽は、競演大会で優勝した団の神楽に強く影響される傾向があり、そうするとひとつひとつの神楽団の個性が薄くなってしまう。「お客さんを喜ばせる神楽も魅力はありますが、本来は『神様に捧げる舞』という信念を持つて舞うべきものだと思います。体育館やイベント会場で舞う神楽もいいのですが、神様がおられる天蓋のある舞殿で、神様に見ていただく神楽を舞うことが本来の神楽だと思います」と長尾さんは「神様に捧げるための神楽」が変わってしまっていることに警鐘を鳴らしています。

次男である長尾さんは、長男が家を継ぐからいつかは川根地域から出て行ってしまう、と神楽団の人から言われたときには、「私は川根に骨を埋めます」ときつぱり言い切ったそうです。その決意から、川根への愛の強さが伺えます。

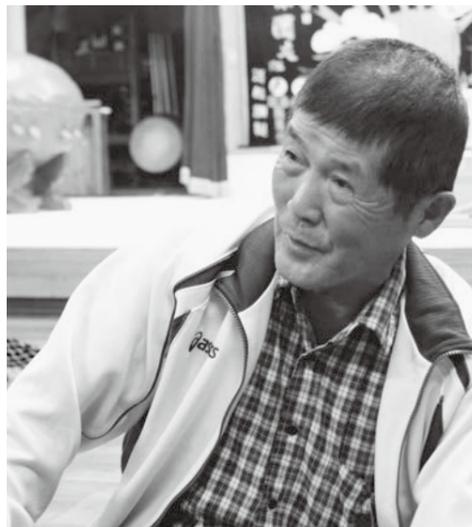
「神楽は時代遅れでなければいけない」と言う長尾さん。「鬼などの悪役が出たときは、今ではドライアイスの演出が多いですが、うちは煙幕筒を使います」と、小道具も旧来からの形を守ります。

「安芸高田神楽の元祖と言われた梶矢神楽団は、重圧があつてこそ。誇りと責任を持ち、舞い続ける神楽が、梶矢にはあります。」

# 神楽の存続のために 安芸高田神楽を担う人々 —その5—

神楽は、それぞれの地域に伝わる伝統文化。どんなに素晴らしい文化でも、伝え、それを受け継ぐ人がいなければ、その文化は廃れていってしまいます。

若い人の力を引き出しながら、神楽を次世代へ伝える。それを実践している人がいます。



安芸高田神楽協議会 会長  
横田神楽団 団長  
久保 良雄さん (75 歳)

神楽を始めたきっかけは、神楽を終わりにしたらいけないという使命感からでした

今年で横田神楽団団長49年目の久保 良雄さん。久保さんが神楽を始めたきっかけは、昭和39年頃、団員不足から神楽団の活動が中断し、そのときに感じた神楽を廃れさせてはいけないという使命感からでした。「農繁期でも神楽団員は練習や神楽奉納に出かけなくてはいけないし、団員の中でも次男三男は家から出て行ってしまった。そのため、団員が減り、神楽ができなくなっていました。神楽にはまったということではなく、神楽を終わりにしたらいけないという思いでした。ただ、やるなら恥をかいたらいけない、活気ある団として次の世代に引き継がなければと、練習に励んできました。」

また、後継者の育成のため、昭和58年頃からは横田の子どもたちに神楽を教え始めました。「神楽を好きな子どもたちが団に入って、今では中堅として活躍する団員もいます。神楽を守る活動をしていたら、多くの若者が集まってくれていました。」

横田のこだわりは、引き継いでから今日まで、基本的には変えていない「神楽の構成」。ストーリーが盛り上がる見せ場のみに時間を割くのではなく、全体のバランスが取れた構成を崩していません。

現在、神楽は舞い方や奏楽が少しずつ変わる傾向があります。しかし、そもそも神楽は口伝で伝えられるため、江戸時代後期に伝わった神楽を現在も持っている神楽団はあります。「守らないといけないところは変えてはいけません。若い者の意見を頭ごなしに否定せず、お互いが納得できる点を探らなければなりません。また、若い者に舞台上に挑戦させて、経験を積ませることも大事なことです。私には、次につなぐ責任があります」と、今後の神楽を見据えて言います。



(写真右)  
練習場に置いてある鬼の面。職人の魂が面一つひとつに込められています。

(写真左)  
本番さながらの迫力で練習に取り組む団員たち。練習を積み重ね、舞と楽の息を揃えます。